



広島市男女共同参画推進センター
ゆいぽ〜と
— 講座・イベント報告書 —

講座・イベント名	男女共同参画基礎講座「日本の女性映画脚本家たちの歴史」
開催日時	2025 年 6 月 8 日(日) 10:00～11:30
講師	広島市映像文化ライブラリー 映像文化専門官 森宗厚子さん
対象	どなたでも
参加人数	24 人
会場	ゆいぽ〜と 5 階研修室
共催・後援・協力	[共催] 広島市映像文化ライブラリー、公益財団法人広島県男女共同参画財団
内容	このたび、広島市映像文化ライブラリーで「日本の女性映画人」特集が開催されます。 [ゆいぽ〜と共催] http://www.cf.city.hiroshima.jp/eizou/prg/cal_202505.html?id=meisaku ゆいぽ〜とでは、ライブラリーの森宗厚子 映像文化専門官が、水木洋子(1910-2003)や高山由紀子(1940-2023)など、女性脚本家たちの歴史について解説します。 日本映画で女性が脚本家として活躍するようになったのは、実は、100 年以上も前からですが、戦前の女性脚本家たちは歴史に埋もれてしまって現在ではあまり知られていません。さらに、戦後にも各時代の変遷を背景に、さまざまな映画の脚本を女性たちが執筆してきました。それらの事実をひもとくと、“女性らしさ”の固定観念にとらわれない活動で道を切り拓いてきた先駆的な歩みが見てとれます。

内容

1、「日本の女性映画人」とは…企画趣旨

① 日本の映画業界のジェンダー格差

2022 年時点の脚本家総数 595 人のうち女性は 102 人であり女性率は 17%と非常に低い。

② 女性たちの業績を可視化

日本の映画史上女性監督はごく僅かであったが、監督以外の職種で活躍した女性スタッフたちが実は数多く存在していた。監督は大卒男子のみという決まりがあった。

③ ジェンダー・バイアスの見直し

従来的に女性向け映画の大半を男性監督や男性スタッフが手掛けていた。男性的な作品を作る仕事でも女性が活躍していた点は看過されていた。女性が作った作品ということを抑えられていた事実もある。

2、日本の女性映画脚本家たちの歴史について

① 1920 年代後半～1930 年代前半【第一世代】（無声映画の隆盛期）

1917（大正 6）年脚本家総数 15 人のうち女性 0 人

1928（昭和 3）年脚本家総数 60 人のうち女性 3 人

1956（昭和 31）年脚本家総数 123 人のうち女性 5 人

林義子、水島あやめ、杜喜久江など若い脚本家が活気に活躍したが、脚本家総数に対する女性脚本家の割合は非常に少なかった。

② 1930 年代～1940 年代【第二世代】（戦前の日本映画黄金期）

戦前の女性脚本家の代表格 鈴木紀子は 20 代から活躍していた。

③ 1949 年代～1950 年代【第三世代】（戦後日本映画黄金期）

水木洋子、田中澄江、和田夏十、楠田芳子などが活躍したが、女性は映画業界とコネクションがないとなかなか脚本家になれなかった。水木洋子は日本で十指に入る代表的映画脚本家である。橋田寿賀子は作品を出しているが業績を残せていない。当時の映画業界は橋田寿賀子の才能を活かせなかった。その後テレビ業界に移り活躍した。

④ 1960 年代【第四世代】（映画斜陽期）

宮内婦貴子、服部佳、大野靖子などが活躍した。

⑤ 1970 年代【第五世代】（映画界の変容と多様化）

高山由紀子、鹿水晶子、那須真知子などが活躍した。高山由紀子は主婦をしながらシナリオを学び、「メカゴジラの逆襲」で映画脚本家デビューをした。映画監督でもある。

道を切り拓いてきた鈴木紀子や水木洋子、高山由紀子などの女性映画脚本家のお話から日本の映画業界のジェンダー格差やジェンダーバイアス（性別による偏見）について知ることができた。

参加者の感想

- 時代背景、それぞれの個人の個性、ジェンダーを始めとするアンコンシャスバイアスの視点からの語りがとても参考になった。
- 映画に関する歴史など詳しくわかりやすく講義いただきありがとうございました。
- 映画の世界もかなりのジェンダーギャップがあり、それを詳しく知ることが出来良かった。
- 映画界の様子がわかりました。
- 新しい視点を得ることが出来、とても楽しかった。
- 女性にとってせまき門だった脚本家で活躍した方を初めて知れました。
- 映画脚本という視点で映画を観ていなかったので、今後気にとめてシナリオというジャンルに注意して映画を楽しみたいと思いました。

講座・イベント風景

